

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：37103

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12404

研究課題名（和文）近代教育漢字字体資料から見た正字とその使用実態の研究

研究課題名（英文）A study on the actual usage of standard glyphs in texts on educational kanji during the near-modern period

研究代表者

山下 真里（YAMASHITA, Mari）

九州女子大学・人間科学部・講師

研究者番号：80756411

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治から戦前までの日本における規範的字体の使用実態を明らかにするため、近代教育漢字字体資料の正字と俗字を対象として使用実態を調査した。その結果、正字を多く使用する漢字（「裏」「歳」など）と俗字を多く使用する漢字（「群」「間」など）が存在することが明らかになった。また、明治から戦前において規範的字体が正字と俗字の2つ存在していた背景について考察するため、江戸時代の辞書を調査した。その結果、漢字字書には正字、早引節用集には俗字が使用されていることが明らかになった。このような正字と俗字の使用差が明治以降にも引き継がれた結果、2つの規範的字体が存在することになったのではないかと考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国語政策において、幕末から終戦までの活字の字体を把握することは必要とされており、そのために『明朝体活字字形一覧』が文化庁によってまとめられた。しかし、ここでは活字見本帳を対象としているため、活字においてどの字体が存在したかは把握できるが、どの字体がどの程度使用されていたのかという使用実態については不明であった。本研究によって、明治から終戦までの日本において、どの字体がどの程度使用されていたのかという使用実態の一端がはじめて明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the actual use of standard glyphs（正字） and nonstandard glyphs（俗字） in texts on educational kanji during the near-modern period. As a result, it was found that there are some kanji that use a lot of standard glyphs and those that use a lot of nonstandard glyphs. The kanji that used many standard glyphs were "裏" and "歳", and the kanji that used many nonstandard glyphs were "群" and "間". In early 20th century Japan, both standard and nonstandard glyphs were the normative glyphs. Therefore, this study examines the background factors behind the coexistence of the two types of normative glyphs of the time. In the Edo period, standard glyphs were used in Chinese character dictionaries, nonstandard glyphs were used in the quick search setsuyoushu. This difference in usage during the Edo period was carried over until the early 20th century. This resulted in the existence of two normative glyphs.

研究分野：日本語学

キーワード：正字 俗字 文字史

4. 研究成果

(1) 近代日本において規範的とされる字体の解明

データベースの作成による規範的字体の把握

近代教育漢字字体資料の字体データベースについては、近代教育漢字字体資料 7 資料の入力作業を完了した。これらの資料は俗字を掲載する資料であり、正字と俗字を明らかにするうえで重要な資料である。これによって、正字と俗字の字体の把握が容易となった。ただし、目標としていた資料数には及んでいない。入力作業は今後も引き続き行っていきたい。

規範的字体の使用実態の解明

戦前のポスター・ビラにおける正字と俗字の使用状況を調査し、その結果を山下(2016b)「近代日本における活字字体の変遷 読売新聞を対象として」(『国語学研究』55)で調査した読売新聞での使用状況と比較した。その結果、ポスター・ビラにおいても、読売新聞の活字においても、多用される字体は正字あるいは俗字のどちらか一方であることが明らかになった。俗字が多用される漢字、正字が多用される漢字の例は以下のとおりである。なお、以下では正字/俗字のように示し、多用される方の字体を囲んでいる。

俗字が多用される漢字	涼/涼	竝/並	羣/群	間/間	回/回
正字が多用される漢字	裏/裡	國/歳	因/友友	派/派	

このことから、正字と俗字ともに規範性を有する字体ではあるが、多用される字体は基本的に正字あるいは俗字のどちらか一方であることが明らかになった。また、多用される規範的字体には俗字も存在したことが明らかになった。

以上で示した俗字が多用される漢字については、戦前の国語政策において発表された漢字表においても俗字が見られる。例えば、「竝(正字)/並(俗字)」「鄰(正字)/隣(俗字)」はともに、大正8年「漢字整理案」、昭和6年「常用漢字表」、昭和13年「漢字字体整理案」、昭和17年「標準漢字表」、昭和21年「当用漢字表」、昭和22年「活字字体整理案」、昭和24年「当用漢字字体表」のすべてにおいて俗字が挙げられている。この他にも俗字が挙げられている漢字は存在する。このことから、正字よりも俗字の方が規範的字体として通用していた漢字もあることが明らかになった。

これまで、近代は漢字の字体が正字に統一されるようになった、と指摘されることがあったが、実際には俗字が使用され続ける漢字も複数存在したことが、以上の研究から明らかになった。

俗字が多用される漢字のうち、「涼(正字)/涼(俗字)」「竝(正字)/並(俗字)」「羣(正字)/群(俗字)」「間(正字)/間(俗字)」は、戦前のポスター・ビラおよび読売新聞の活字を調査した際、正字がほぼ見られなかった。それでは、正字はどのような資料で使用されていたのだろうか。この点について明らかにするため、正字の使用が多いと考えられる中等漢文教科書を対象に調査を行った。その結果、「涼(正字)/涼(俗字)」「竝(正字)/並(俗字)」「羣(正字)/群(俗字)」「間(正字)/間(俗字)」いずれも正字が使用されていることが確認された。以上の研究によって、規範的字体として多用される字体が正字であるか俗字であるかは漢字ごとにある程度決まっているものの、資料によっては、正字の使用率が極めて高いものも存在することが明らかになった。

(2) 近代日本において規範的とされる字体が複数存在する要因の解明

近世における正字と俗字の使用状況

近代日本において、正字と俗字という複数の規範的字体が存在した要因を明らかにするため、江戸時代(以降、近世とする)の辞書を対象として、正字と俗字の使用状況を調査した。辞書を対象としたのは、規範的字体が見られやすいと考えられるためである。

調査の結果、早引節用集などの通俗辞書と漢字字書とで使用される字体が異なっており、早引節用集では俗字が、漢字字書の見出し字では正字が使用されることが明らかになった。このような正字と俗字の使用差が近代にも引き継がれた結果、近代日本において規範的な字体が複数存在することになったのではないかと考察した。

近代における正字と俗字の使い分け

「甲」と「吊」の使い分けについて明らかにするため、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」を使用して、1877年から1944年までの使用状況を調査した。その結果、1900年頃までは「甲」字が使用されることはほぼなく、「吊」字がとむらうの意味で使用されていたこと、1900年代以降、「甲」字がとむらうの意味で、「吊」字がつるすの意味で使用されるようになったことが明らかになった。このことから、複数の規範的字体が存在する要因として、正字と俗字が意味によって使い分けられている可能性があることが示された。今後は調査資料を増やすことで、「甲」と「吊」の使用実態を明らかにする必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山下真里	4. 巻 1
2. 論文標題 近代日本の正字と俗字の根柢	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本漢字学会報	6. 最初と最後の頁 109-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下真里	4. 巻 59
2. 論文標題 近代日本の手書き字体における規範的字体の使用実態 戦前ポスターを対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語学研究	6. 最初と最後の頁 357-368
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下真里	4. 巻 4
2. 論文標題 正字と俗字から見る国語政策における漢字字体	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州女子大学学術情報センター紀要	6. 最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山下真里
2. 発表標題 近代日本における「巾」と「吊」の使用実態 読売新聞を対象として
3. 学会等名 ことば工学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山下真里
2. 発表標題 「甲」の字体について
3. 学会等名 漢字漢語研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------